

藏板



知の拠点
盲千人

マツチ
擦り

あなかしこ 元号枕にすだく虫

独り言つ ヒロヒト骨を拾いしや

アキヒトの竹光 堀を浮き沈む

大嘗祭 国は透かしを嚼^かまし置き

お膳立て 元号元首迎えしや

五輪祭 鼻っ面に小判かな

金メダル 尻をたたけば舞い上がり

輪をくぐる 巨万のとみとあぶく銭

限りなく政財挙げて 小判鮫

家方の道楽息子 アショア買い

しばりっこ 縛につかずや財務相

省の虫 適材適所で汁を吸い

官官の死屍答打つも 代官所

裁量のクニの時計で 死を刻み

嘘の皮 針を呑んでる毒饅頭

パンドラの箱 開かずの蓋を載せ

不条理の紙 不可逆の墨を塗り

慰安婦も微用もあり 天[※]つ国

拉致ひとつ 余すことなく調法し

私^{マイ}の番号^{ナンバー} 成りにすましたてまえ技

※天つ国は天上にある国、たかまが原。つまりは神のケニ。

国難と緊急事態にムチを呉れ

地球儀のトノサマバツタ逃げ隠れ

九条に一物隠し 添い寝する

ハレモノに襷掛けたり 総裁選

全員野球 日本会議のユニホーム

日の丸のふんどし締めた はだか虫

相似形アベの清盛 太刀を帯はき

ファシスト 盲の鬼に手をたたき

障害の上前はねる 政所まんどころ

トリックル 夢の雫で落ちてきて

よるべなき知のさ迷いて マツチ擦り

灰かぐら亡びの宴 書に焚けり

焚くほどに身の凍える 焚書哉[※]

儂くて身にやけどの紙魚かなし

然ればとて「百年の孤独」[※] 燃えやらず

※高知県立大で大量図書の焼却処分がなされた。

※「百年の孤独」IIラテンアメリカ史を現実と幻想を交え魔術的手法で描いて空前のベストセラーとなったコロンビアのノーベル賞作家ガルシア・マルケスの小説。

風に哭く白き頭こしらや 笙の笛

鬼瓦シーサーが ヤマトの邪鬼を祓いのけ

琉球の美ちやら海わたる 指の笛

あこぎなる神も 汚れし掌をぬぐい

西海岸女神(たいまつ)トーチの灯をおとせ

秋水の墓に舞いては 水を吸い

淡雪の墓碑にしみいる 秋水忌

目を閉じて 生涯露宿の石地蔵

耳の経 隠亡ほる穴一つだけ

独り経 おでこで叩く木魚哉

石棺に片足あずけ 炉を焚くや

原子カムラびとありて 核質化

列島に一服ありて 火山灰

かくありて 核の傘さす神の国

平成のつんぼ 棧敷に 木魚哉

千一夜[※] ランプ擦りて血のにじみ

毛もよだつ アラブの夜話に灯は点る

指折りの列強砂漠のあぶら舐め

血に染みたオイルマネーは武器と化け

おぞましきアラブの春の 夜とき哉[※]

※千一夜 II 「千一夜物語」。シエエラザードという才女の千夜にわたる

「アラジンと魔法のランプ」などのアラブの物語り。

※夜とき (夜伽) II 枕のとき。死者を葬う前の通夜。(広辞苑)

負の遺産 破れし手旗はしやぎおり

難民に有刺鉄線 キバを剥き

けったいな 鉄条網のお出迎え

おそまつが絵解きに適う トランプ王

大統領とんだはらわた見せたがる

転生のほとけ苦界の 鬼と化し

ミナマタ忌 魚ネコなぞ舞うており

チツソ祖 海の幸なぞお召しかな

水俣の猫もおどりし魚を食い

逝きゆきて 苦海浄土*に生きる 女ヒト

※昨年亡くなった作家の石牟礼道子さん。

N H K 走狗したたか汗をかき

風が梳く しだれ柳が身をよせる

自己責任 メディア破れし菰被り

身の丈を登りつめたる 崖つぶち

言うてみる 一旦緩急事態法

人知れず 過酷に生きて闇に果つ

猫の手が欲しいと言えば見透かされ

海わたる核のヨメ入り 破談して

幾許いくばくの嗶しきがれし声は 蛇口かな

疫病神 はやる心の売りと買い

二〇一九年の歳明けを前にして辺野古への土砂投入という、沖縄県民の心に寄り添った振りかまわぬ暴挙が始まり、目を置かずしてエメラルドの海は土色に変色しはじめたとメディアは報じた。

その夏、はからずも昭和天皇にまつわる「小林侍従日記」なるものが開示され、自らの戦争によるトラウマの様子がこまやかに記述されている。曰く「細く長く生きても」とか「文学的なことは」などと、戦争犯罪にかかわる問い掛けにはひどく口籠もった言い方をしている。そんな光景の中、アキヒトは慰霊の旅を続け、もってA級戦犯を合祀したヤスクニ参拝をも相次いでポイコット！ 神社庁、日本会議など極右のウロコを逆撫でる。《真逆の道しるべ》アキヒトの『平和への道』片やシンゾーの『戦争への道』。二つの矢印の交わることは無い。人びとはそんな風に気づいているのでは！。

折しも、皇室の神事「大嘗祭」を巡り、秋篠宮の発言などがあって、公権力側は色をなしている。天皇を元首にと綴った憲法草案の主たちしてみれば、国家主権が犯されると危惧しているのか。

さて、知らぬまにまの焚書事件。こともあろうに高知県立大が、図書蔵本を大量に焼却処分してしまった。中江兆民あり、幸徳秋水、寺田寅彦、等々の著書、フォークナーありガルシア・マルケスの『百年の孤独』など海外文学の数々。他に郷土史、歴史資料など数えれば三万八千余冊。身の凍える一挙。国びとはスマホ片手に、文明の軛にはまってしまったのではないか。眺むれば、無色透明のゼリー状”とは、地元の記者の喝破なり。天皇の代替わりにつれて平成の幕は引かれ、新たな元号を手にした妖怪たちが、蠢くことになるだろうか。